1910～20年代の大阪に見る小公園の設置とその位置付け及び管理に関する論議の検証

A Study on the Detail of Small Parks Foundations and the Discussions over the Park Significance and Management at Osaka in 1910-20's

永橋為介*

Tamesuke NAGAHASHI

摘要：本稿では1910年代後半から20年代にかけての大阪の近代化の中で、「貧民窟」に小公園が設定された経緯と公園の位置付け方に注目する。そして、1915年における小公園設置とその後の経緯を、当時の社会状況、特に、社会編成および都市改編の展開の中で捉え直すことを目的とし、公園設置の理念と実際に現象した管理や利用をめぐる衝突を問題化する際の言説の関係を考察する。当時の社会政策や空間政策に携わる専門家や官僚らは、社会改良や都市改良の手段として公園の役割を積極的に位置付けようとしたが、しかし、公園という空間そのものが物理的にオープンであるが故にはらまざるを得ない多種多様で雑多な人間を迎え入れる機能に対して、それを管理するために必要となる理論的な枠組みは当時の公園論には形成され得なかったことが検証できた。

1. はじめに

本稿では1910年代後半の大阪の近代化において「貧民窟」に小公園が設定された経緯や、1920年代後半（昭和初頭）までの公園の位置付け方に注目し、1915年における小公園設置とその後の経緯を、当時の社会状況、特に、社会編成および都市改編の展開の中で捉え直し、公園設置の理念と実際に現象した管理や利用をめぐる衝突を問題化する際の言説との関係を考察する。

先行研究¹⁾では、1909（明治42）年の「北の大火」後の整備事業として提起された小公園設置が市会での議論の結果不成立に終わったことを紹介した後、1915（大正4）年に大正天皇大典記念事業として市会で決定された小公園設置の審議過程を検証し、小公園設置をめぐる市会での議論に「利益誘導型」等の政治的駆け引きの様相があったとの評価を下している。また、「小公園そのものの在り方は閑却され」むしろ「政治的均衡を求める」べく「紆余曲折の審議に終始した」と指摘するが²⁾、筆者は「小公園そのものの在り方」が当時の社会状況の中でどのように認識されていたのかをさらに検証する必要があると考える。

1915年に提起された大典記念事業としての「小公園そのものの在り方」は、先行研究でも引用している史料において「地方ノ良好ナル情勢ヲ助長スルヨリモ其不良ナル情勢ヲ改善セン」³⁾と記されており、当時「貧民窟」「貧乏部落」とみなされていた地域に小公園は設置される。「貧民窟」への小公園の設置が社会に及ぼした影響の一端を先にあげるならば、1920年代に入り、その利用・管理をめぐる問題が指摘されはじめるのである。

また、先行研究では「当時の小公園事業には（中略）下層社会に対する一種の慈善事業の臭みが強く感じられる」と指摘し小公園の設置と「下層社会」や社会状況との関係を示唆している。本稿では、当時の社会事業や空間政策の携わる専門家や官僚が、どのような言説を用いて小公園の設置と「下層社会」や社会状況に関係づけて考えるようになったのかを更に検証し、当時の社会状況の中で小公園設置の位置付けを把握し、空間の社会的意味や、計画の実現が社会に及ぼした影響を問う必要があると考える。

具体的には、第2節で1910年前後の大阪における小公園設置の初発の論議を検証し、第3節で1910年代後半から20年代にかけて登場する社会政策や空間政策に携わる専門家や官僚の公園論

の分析を通して当時の社会状況の中で公園に期待された役割や位置付けを把握し、第4節で小公園設置後の公園設置の理念と実際の利用や管理をめぐる問題を扱う際の言説との関係を考察する。

2. 小公園設置に際しての論議の検証

(1) 「北の大火」復興計画としての小公園設置

1915年10月27日の大阪市会本会議で「大典記念事業」として市立博物館と小公園の設置が提起され承認された⁴⁾。大阪市内においては初めて小公園が設置されることになるが、小公園設置そのものについての議論は1909年の「北の大火」復興計画としての小公園設置の議論まで遡る⁵⁾。その際、市当局は小公園設置の理由として、1. 児童の遊び場、2. 有事の際の避難場所、3. 夏季の休憩所という位置付けが「米国人のサジェスション」によってなされたことを説明している⁶⁾。これに対し、市会では各議員からレベルの異なる多くの見解や、また同レベルであっても互いに相いれない見解などが出される。

例えば、1人の議員は「小児ノ遊園ハ小学校付近若クハ構内トセハ学校ノ風趣ヲ添ヘ又大火場合延焼防遏ノ効ナキニ非ラス」と小公園設置の意義を認めるが、「地価不廉ト認ムヘキモノアルノミナラス（中略）興業物難開ノ地ニシテ小児ノ遊園トシテ好適ノ地ト謂ウ可カラス」⁷⁾との理由で市当局の敷地設定を論難し議案そのものを否定する。また、他の議員からは「坪数ヲ減スルモ成ヘク多数ノ小公園ヲ設ケン」という見解が出され、8月9日の時点で小公園設置計画案は焼跡整理計画から削除された⁸⁾。

同年9月2日、市当局は「小公園新設及道路新設並ニ拡張ニ関スル件」として小公園5ヶ所（総面積1535坪：各329坪、351坪、369坪、454坪、462坪）の設置を再提案したが、議員から小公園を北区に「遍在」させることに異論が出される⁹⁾。その他、(1)300坪内外のものを散在させるよりも、1000坪程度のものを設置するべき、(2)小公園は市内4区にわたって設置するべきであり、以上のことが実現されないのであれば小公園設置に踏み込むべきではないという見解も出され、「北の大火」復興計画の一端としての小公園設置は見送られる¹⁰⁾。

市会議員の反対意見に対する市当局の見解としては、全市にわたる小公園設置の希望には同意しながらも「経費上及び工事上」

* 京都大学大学院農学研究科

の理由から全市域への小公園設置は困難であり、市としてはたとえ市域の一部であっても小公園設置を実現したいと主張する。当時の後藤助役も、今回は「人家稠密ノ地ヲ買収」する必要はなく、「焼跡地ニ之ヲ新設シテ衛生上其ノ他不測ノ変災ニ備フルハ最機宜ノ措置（後略）」¹¹⁾ であると主張する。

市会議員の中には小公園設置に賛成する議員も数名おり、経費上の問題を緩和するべく社寺境内地へ小公園を設置し「小児遊戯場及都市美観」を実現するよう主張する。この意見に対し設置反対議員からは、すでに神社仏閣によってその目的は達せられており小公園の新設は必要ない、という見解が示される¹²⁾。

以上、1909～10年時にかけての小公園設置をめぐる議論を概観すると、小公園設置の位置付けに関する見解は、賛成反対を問わず複数のレベルで錯綜しているように見える。例えば、小公園設置に反対する見解は「反対」という点では一致しているが、設置反対の根拠としての小公園敷地の規模に関する見解は整合性を欠いている。具体的に言えば、市当局が1箇所当たり1000坪の計画案を提出すれば小規模多数配置を主張して反対し、次に市当局が1箇所増して小規模設置を提案すれば1000坪程度の規模を主張して反対する。また賛成反対の議論に見られる「小学校の校庭で充分」「社寺境内に小公園を設置する」「社寺境内がその役割を果たしているから小公園は必要ない」等、小公園という空間装置の機能や位置付けを巡る見解やイメージも錯綜している。

小公園の機能、意義、イメージのそれぞれのレベルにおける議論の錯綜や不整合は、中央レベルでは公園設置の位置付けについての議論が展開されていたにもかかわらず¹³⁾、大阪においては公園設置の理論的枠組みが未だ不統一であった、という読みとりを可能にしてくれる¹⁴⁾。次項で見る1915年の市会における「大正天皇御大礼記念事業としての小公園設置」議論では、「人家稠密の地」に公園を設置するという見解で一致していた¹⁵⁾。

(2) 大正天皇大典事業における小公園設置の敷地設定

「北の大火」復興計画としての小公園設置が廃案になった6年後の1915年10月に「大正天皇御大礼記念事業」としての小公園建設が市当局から提示される¹⁶⁾。小公園の具体的な敷地が示されたのは翌年2月26日の市会本会議であり、「東区清水谷方面、西区九条町方面、西区阿波座方面、南区木津方面、南区御蔵跡町方面、北区西野田方面、北区北野方面」¹⁷⁾の7ヶ所であった。

敷地選定調査結果報告では「現在既ニ良好デアル所ヲ彌ガ上ニ良クシヤウト云フコトヲ避ケ（中略）付近ノ事情ノ宜シカラザル所」を改善するべく7ヶ所を選定したと説明している¹⁸⁾。

この時、7つの敷地を提示しながらも阿波座方面の予算見積もりだけが提示されたことから議論が紛糾したことは先行研究で紹介されているが、例えば（表-1）のやりとりが行われている¹⁹⁾。

「貧乏部落トデモ言ハウカ、先ヅ労働者ノ所」が小公園敷地設置の優先順位として一番高いことがこのやりとりから読みとれる。参事会で阿波座方面を第一に設定したのも同じ理由によるとの説明もなされており²⁰⁾、難波、九条、西野田が「貧乏部落」と認識されていたこと、そして市の中心部に位置する阿波座にも裏長屋が多く存在したことが窺える。2月26日の本会議では結局「7ヶ所」という規定の削除が求められ、あらためて委員会を設け、再度敷地設定についての検討を行うことになったが、次の10月2日の本会議でも小公園の敷地を「貧乏部落トデモ言ハウカ、先

ヅ労働者ノ多イ所」に設定することは踏襲されており、委員会での議論の後7ヶ所の敷地が再指定された（表-2）²¹⁾。

市内各区ノ地形上円満ニ参ルヤウニ大体ノ御趣意ニ依リ、人家ノ密接ナ場所ヲ選ビマシタノデ自ラセ七ヶ所ニナリマシタ²²⁾ (1916/10/2)

北区西野田方面、南区木津方面、北区北野方面は、明治19年12月公布の宿屋営業取締規則で木賃宿指定地となった場所であり、当時は労働下宿等が立ち並び、共同宿泊所・労働紹介所が設置された場所でもある²³⁾。南区御蔵跡町方面は日本橋筋すなわち旧長町に隣接している²⁴⁾。

1909年の「北の大火」後の整備事業として小公園設置が議論された際には、小公園設置の位置付けや計画のレベルでの統一した見解は得られていないが、1915年から16年にかけての大典記念小公園の敷地設定については「貧乏部落」「人家稠密の地」を建設敷地とする見解が一致していたことを確認できる。次節では、当時の状況下で公園がどのような効能を期待されていたのか、当時の公園論から検証する。

3. 第一次大戦後の社会状況と公園の位置付け

(1) 教化施設としての公園

1910年代半ば（大正初頭）から、当時の大阪府知事大久保利武や社会事業の第1人者である小河滋次郎、大阪市高級助役であった関一らによって、都市社会政策は救済事業だけでなく、教育を通じて、雑多な人々を「良国民」「健全なる労働者」「市民」へと馴化する意図を有するという議論が興隆してくる²⁵⁾。そうした中、米国の事例をひきながら、都市社会政策における保護、教育という側面を「文化政策」という枠組みの中で理論的に整理し、特に小公園の位置付けを児童保護、児童遊戯の空間装置として再設定したのは元毎日新聞記者で米国留学から帰国した後、大阪市嘱託となった水野和一である²⁶⁾。

水野は米国の児童遊園が「都会の塵埃、雑踏から児童を保護し、児童のために小遊園を設け、児童の楽園たらしむるための運動」によって設置されたことや児童遊園への「プレー・グラウンド・ウォーカー」の配置を、「九十年前にフレーベルが『都会は其の児童の保健娯楽のため必ず数個の小遊園を有せざるべからず』と云った理想が漸く実現されし感がある」と賞賛する。その対比の上で、国内の状況を「東京及大阪に児童遊園を設けられたがまだ、廣く、各都市に及ばず、且つ東京及大阪と雖もまだ完全なる遊園系統を有しない。児童遊園は文化的意義を有する小公園である」と述べ、公園の概念を明らかにするために公園の性質を1)国民公園（ナショナルパーク）、2)市民公園（シティーパーク）、3)小公園（スモールパーク）及児童遊園（チルドレンスプレーグラウンド）、4)娯楽公園（アミューズメントパーク）」に分類し、国民公園の例として奈良公園を、市民公園の例として東京日比谷公園、大阪天王寺公園をあげ、「小公園及児童遊園」は「特設の児童遊園及街頭の広場等（スクエアー）」であり、娯楽公園の例として「東京浅草、大阪ルナパーク付近」をあげる²⁷⁾。

水野は特に「娯楽公園」が「教化及保健の上から見て市民公園及児童遊園と反対の刺激を周囲に及ぼしつつ」あり、「文化政策の不統一な我国の都市では娯楽公園が市民公園の清浄と静謐とを

表-1 1916年2月26日大阪市会での議論

樋口議員	難波、九条、西野田方面ノコトキハ貧乏部落トデモ言ハウカ、先ヅ労働者ノ多イ所ヲ選ンデ之ヲ遂行スルノガ当リ前デアラウト思ウ
池上市長	最初ハ（引用者註：参事会でも）九条ガ適当ダラウトスウ云フコトニ調ベマシタノデアリマス、ケレドモ尚ホ其後調査イタシテ見マスルニ其ノ適当ナル地所ト認メマシタ所ハ偶々小学校ノ位置ニ選定セラレテ居ル（中略）第二ニ見テ居ッタ所ノ阿波座ノ方ニ變更シ

表-2 1916年10月2日大阪市会で決議された小公園の敷地

1. 北区西野田「戎神社ノ直グ裏手ノ神社ニ接続シタ所」：500坪
2. 西区九条「九条ノ学校ノ西南、筋向ヒトモ云フベキ場所」もしくは「少シ南西ニ寄リマシタ二番道路ト云ウ処カト思ヒマスガ、空地ノ多イ処」：約600坪
3. 西区阿波座「明治学校ノ西手（中略）学校ニ近接シテ居ル処」：500坪
4. 南区木津「北島町」もしくは「西浜町ノ一部」さらに東の「大黒町ノ一部」：800坪
5. 南区御蔵跡「大分人家ニ密接シタ場所（中略）其ノ頃日本橋ノ三丁目ノ学校ガ或ル事情ノ為ニ移転セバナラナヌコトニナツテ居ルノデ、其ノ学校ノ一部」：500坪
6. 東区清水谷「市中ノ高地トモ云ハルル至極良イ部分デ、人家モ密接シテ居リ」：800坪
7. 北区北野「網敷天神サン直ニ北手デ同ク社ニ接続シタ所」：500坪

破りつつある事例に乏しくない」ことを危惧する²⁸⁾。

こうした状況に対し、水野は救済事業・感化事業・文化政策との関連性を重視し「此の三つの事業が並行して、初めて都市社会政策と云ふものが完成される」²⁹⁾と述べ、文化政策を1)「市民教化のため博物館、図書館、美術館等の教化機関を建設する事」、2)「細民、つまり労働者、下層階級に対して教化機関を設ける事」、3)「児童の保護施設—孤児とか、貧児とかの教育機関でなくして、一般の児童に対する保護事業」を一括して「文化政策といふ名称を付けたい」と主張する³⁰⁾。

「貧民」だけを施策の直接の対象とするのではなく、「貧民」から「市民」へという回路そのものを対象とする施策、もしくは、さらなる「市民」化への施策として文化政策が位置付けられている。実際の施策として、「市民教化」のためには「博物館、図書館、美術館等」を、そして「労働者、下層階級」に対しては「教化機関」を建設するといったように、空間装置の機能や役割を重視し、回路そのものを対象にしながらも「貧民」と「市民」との間に施策の分類・分離を行っている。

「貧民」から「市民」へ、というテーゼからは次のようなことが読みとれるだろう。すなわち、ここでいわれている「市民」は、人々を教化した結果創出されるであろう存在であり、かかる意味において実はまだ存在しない＝フィクショナルな存在である。それゆえ「市民」という名辞は、積極的な意味を付与される標識としての意味を有する。一方、「貧民」という言葉は、健全なる「市民」教化の対象となる人々一般に対して付与された劣位の標識としての意味を有しており、「貧民」と「市民」は、互いが互いを参照し規定しあっている共立的な関係概念であることに注意しなければならない。しかし、現代の我々は、「貧民」と「市民」という分離およびその分離に応じた空間の配置をフィクショナルな存在としての「市民」創出を意図した技術としてではなく、つい当たり前のこととして受け入れがちである。

こうした認識の在りようを、空間論にひきつけて考察するならば、ある存在を言説の上で分類するだけではなく、空間的な配置によって分類・分離すると、その分類・分離そのものは、近代化を進める側によって意図的かつ戦略的に実行された行為であるにもかかわらず、空間化が一度なされてしまえば、気付いたときには空間的に実体化されてしまっているが故に、近代化を進める側の意図は見えなくなり、そうした配置以外には考えられない自然な状態・現象として認識されてしまうのである。

さて、教化の空間としての公園の効能、すなわち、公園が人心や身の処し方を改良し得るという積極的な位置付けは、1909（明治42）年より神戸新川の「貧民窟」で伝道に携わり、友愛会や『救済研究』誌の編集にも関わり、労働運動、農村運動、セツルメント運動等の中心的役割を担った賀川豊彦も述べている。

公園は亦都市の重要な刺激物なり、我国に於ける公園は殆ど箱庭的なものにして（中略）我国諸都市の公園は群集を収容するの余裕あるものなし。市俄古市は有名なる不良少年の多き都会なりき、然るに1912年延長二里の公園を『ミシガン』湖畔に設けた結果、之等不良少年約6割を減少せしむることを得たり、これ彼等の強烈なる刺激を放散するに都合よかりしと群集心理の淘汰功を奏せるが為にして大いに注意すべき事例ならずや³¹⁾

さらに賀川は大都市の児童の身体虚弱を問題視し「児童の健康維持」のため、運動場としての公園設置を主張する³²⁾。

(2) 「貧民窟」の問題化と公園の称揚

前項で見てきたように、水野和一は社会編成すなわち市民への馴化、教化の装置としての公園の位置付けを「文化政策」という枠組みで提示し、賀川豊彦は都市改良および「健康維持」の手段としての公園の効能を描いて見せた。これらの公園論に共通する

技術は、公園の位置付けを理論的に語る際にも、あるいは具体的に語る際にも、欧米の先進性との対比の上で国内の後進性を提示することであり、また国内においては「貧民窟」との対比で公園の効能が語られる点にある。

当時の都市問題は、都市への人口集中や過密状態からもたらされる衛生状態の悪化、治安・風紀の乱れ、劣悪な家屋状態という項目を用いて「貧民窟」を問題化することで象徴的に語られていた³³⁾。賀川も公園の必要性を説く同じ論考の中で、治安・衛生・風紀の観点から「貧民窟」を問題視し、「貧民窟を都市の中心地より移動せしむる」必要性を説いていた³⁴⁾。

例えば、「貧民窟」の問題化は次のように行われる。

本邦木造住宅にてはその構造上同一にこれを律することを得ないが、陰鬱なる居住沈滞せる空気は密集居住せる住民をして益々健康状態を不良ならしめ尚又精神上的の悪弊を根底よりこれを断つこと更に至難と言はねばならぬ³⁵⁾

「貧民窟」は「沈滞せる空気」に満ちた空間であると表象され、逆に「空地・庭園・公園」は「沈滞せる空気」を払底し、新鮮な空気を送り込む空間として表象される。当時『救済研究』誌上において都市問題について執筆を行っていた戸田正三は、農村から都市に若者が流入し大都市においては住宅が欠乏するため狭隘な家屋に住まざるを得ず、「所謂過住生活（overcrowding）を成しつつある」³⁶⁾ことを問題視し、次のように述べる。

実に、市内の空地例えば住宅の前庭及後庭就中裏庭は、住宅の呼吸要路に相当し、其他、市内の自由空地、公園、広場、遊園、道路等は、大呼吸管に相当し、相俟って吾人の肺臓に相当すべきものである³⁷⁾

都市の過密状態を解決するという公園の効能が社会的リアリティーを有するものとして語られている。都市の環境悪化を「貧民窟」に象徴させて問題にすることと公園を都市改良の手段として称揚すること、すなわち「貧民窟」を都市の否定的な空間、公園を肯定的な空間として表象することは輻輳していた。

また当時「客観的・科学的・合理的」であることが不可疑とされた都市計画³⁸⁾による都市改編の中で、公園が他の空間装置と並んで相対的に位置付けられることにより公園の効能が合理的・客観的に保証されていく。例えば、当時の内務大臣である水野錬太郎は公園の位置付けを以下のように記している。

道路の如きは他日相当の発展の時を考へずして自然の儘に放置すれば他日市民の享くる不利益は蓋し甚大のものあらん其他、公園、学校、等の配置に関してもその日暮しの都市は百年の悔いを胎すべき也。即ち将来の悔いを胎さざる為に今日に於て計画を立てざるべからず³⁹⁾

なお『都市計画要鑑』に記された「大阪都市計画」には、「公園系統」を実現させる公園と公園を結ぶ道路について「市内不潔ノ地ヲ通過センメザル為並木其ノ他ノ設備ニヨリ道路及其ノ付近ヲ特ニ風致的ニ整へ」⁴⁰⁾ることが明記されており、公園の設定が都市計画からの「客観性・合理性」を付与されつつ「貧民窟」を問題視する技法として用いられていたことの一端が読みとれる。

4. 小公園設置後の位置付けと利用・管理をめぐる論議

(1) 社会政策の側から提起された公園の位置付けと問題化

さて、1916（大正5）年に市会本会議で決議された小公園が、第一次大戦や米騒動以降次々に開園し、開園と同時期に市営住宅や共同宿泊所も開設し、敷地には中庭や運動場等のオープンスペースが設置された（表-3）⁴¹⁾。

1920年代に入ると、開園、開設された都市オープンスペースの利用・管理をめぐる問題化がなされるようになる⁴²⁾。例えば、市営社会事業視察を行った小河滋次郎は、市営住宅付設の「遊園」が共同宿泊所に接しており「遊園に出入りする子女に対して縷々

家泊の荒男共が、其の室内より如何はしき不法なる振舞いを演ずることあり」という当時の新聞記事の存在を記しているが、小河自身「特にこの点に就て実際の状況を研究する所ありしも、這はさまで深く懸念するに足らざるの事態なるを確かめ得たり」⁴³⁾という報告を行っている。

1919（大正8）年に開設された大原社会問題研究所の研究員である大林宗嗣は1921（大正10）年の7、8月の2ヶ月にわたって大阪市内の公園（天王寺公園、中之島公園、野田小公園、御蔵跡小公園、北野小公園、阿波座小公園、清水谷小公園、九条小公園、西九条小公園、築港遊園）の利用実態調査を行っており、その中で、公園管理に関するいくつかの報告を行っている⁴⁴⁾。

大林の目には「児童の遊戯設備を大人が占領して児童にその機会を興へないでいる」「青年が数名で石投げ競争をやって公園外に遠く石を飛ばして興じていた」「公園番人の撒水ホースを取り上げて中年の労働者が水のかけ合ひをして第三者に迷惑をかけていた」「飲用の水道栓の下で労働者が裸体で水浴をして居た」「多くの公園ではアイスクリーム商人が入り込んで客に売りつけていた」「その他自転車の乗り入れ、ベンチの昼寝等」⁴⁵⁾等が、管理上「甚だ不行届きで且つ不体裁」であると映っていた。逆にいえば、大林が望む公園はこうした存在や行為のないものであることが窺える。なお、大林は公園で利用・管理上の問題が生じていることを言及するに止め、管理施策への提言は行っていない。

大林はこの調査報告書の4ヶ月前に『都市社会政策としての公園問題』を刊行し、欧米諸国の「先進事例」や公園論を援用しつつ、自らの公園論を展開している。大林は（「引用者註：公園が」）都市の美観を保つ為の装飾であると考えた時代は最早過ぎ「市民生活そのものに取って直接の必要」が公園には認められ、その建設目的は「市民生活の衛生的教育的娯楽的目的」「土地そのものの合理的発展の為」であると主張し⁴⁶⁾、公園の利用者としては「公園を最も必要とする人々は寧ろ郊外公園を利用し得るが如き時間及び金銭の余裕を有せざる階級の人々である。換言すれば公園設立の目的は最大多数の民衆即ち労働者階級の為である」⁴⁷⁾と「労働者階級」の存在を強調していた。

また、東京の芝、上野、浅草、日比谷等の大公園が市内にあること、日比谷以外の大公園小公園が何れも「貧民窟」にある一方で「大阪では浜寺、箕面、大浜、住吉等」の郊外公園が多いが、これらは「中産階級以上のための公園たる趣を呈していて、労働者階級に利用せらるる事は甚だ稀である」と指摘する⁴⁸⁾。

大林は、「労働者階級」の存在を強調するが、当時、社会政策における「労働者」といった名辞が労働規律の観点から関係概念的に語られていることを鑑みれば、大林が「労働者階級」という際には「健全な労働倫理を内面化した労働者」という位置付けが内在されていることに注意しなければならない⁴⁹⁾。

大林の公園論展開を検証すると、社会政策の観点から公園を考えた際には「労働者」の優先順位が高くなっており、一方、実際の公園での「労働者」の立ち振る舞いを目の当たりにした際には、「労働者」の行為は逸脱として提示され、その場合、公園の利用

者の優先順位としては「児童」の遊戯が第一に挙げられている。つまり、社会政策の観点から想定された公園の利用者像が、実際の利用をめぐる衝突が生じた場合にはその優先順位が何の説明もなくシフトされており、このことは、利用者の優先順位をめぐる整合性の欠如として読み取ることができる。

(2) 空間操作の側から提起された公園の位置付けと問題化

1924、5（大正13、14）年には大阪市社会部や公園課によって公園内の「浮浪者」調査がさかんに行われるようになる⁵⁰⁾。1920年代中頃にクローズアップされた野宿者の存在に象徴される公園内の管理について、公園のプランニングおよびデザインに携わる領域から公園内における「無頼漢」の存在を問題にしたのは、大阪府都市計画委員会委員として府立公園・都市計画公園の計画に携わる大屋霊城であった。以下、大屋による公園の位置付けと利用者像の設定についての検証を進める中で、大屋自身による管理問題の提起と検討の仕方を探っていく。

大屋は大正天皇大礼記念事業の7つの小公園を「大阪市に於ける児童遊園を目的とした公園の抑々の始まり」であると位置付け、さらに西九条小公園、扇町小公園、築港遊園等をあげ「今日では児童の遊び場本位に計画された小公園は約十数カ所に」に及んだことを評価する。しかし、にもかかわらず小公園が「市民の間に余り好い評判を持っていない」ことを問題とし、その原因として「或る家庭では主人が自分の子供を小公園に遊ばせることを絶対に禁じて居るところもあり又或人は小公園は無頼漢の巣窟だと悪評している」ことを紹介する。そして「小公園そのものが無価値のものであろうか又その設計宜しきを得ぬ為であらうか。或は又管理の方法を過って居るのであろうか」と提起するが、「こんな問題を市当局は研究した事があるであらうがその結論はどうであつたろうか、吾人はそれを1日も早く聞きたいものである」⁵¹⁾と公園の管理問題を市当局の責任としてこれを預けている。

大屋は、1927（昭和2）年の論考『公園設定の急務』の中で公園を「都市民唯一の清涼剤」に喩え「花見遊山の道具」ではなく「都市に活動する者のすべてがこれを渴望し、これに依りて生きて居るのである」と主張し、都市環境の悪化に対置して公園の存在意義とその効能を定置している⁵²⁾。都市環境の「惨状」については「過群密集、目に一草一木の自然をさへ敢て見ず薨の波の巷に肉と酒と悪習と雑踏」と記し、さらに「狭隘なる牢屋檻比せる場末の裏町は垢衣を纏ふた婦女子の群によって異様の臭気さへも漲らせて居」り現代の都市は「全く『善をなし難く、悪をなし易き場所』に成ってしまつて居る」⁵³⁾と説明する。この説明は、都市環境における衛生・風紀の悪化を「貧民窟」の状況に象徴させることによって成立していることをまづ押さえておきたい。そして、大屋は「都市の改良、都市の計画」の意義を次のように語る。

都市の改良、都市の計画と云うのは決して表通りの立派に成ることのみを以て到達しうるものではない。最も不潔な、最も貧困な、最も哀れむべき無産階級の市民があくせくとして、働き住んで居る場末町が十分の光線を空気と水に恵まれて立派な軒を並べるように成つて初めて都市の計画は完成されるのである⁵⁴⁾

都市環境の「惨状」を語る際には、「肉と酒と悪習と雑踏」の中の「垢衣を纏ふた婦女子の群」と表現され、「全く『善をなし難く、悪をなし易き場所』に成つてしまつて居る」と評価された人々が、「都市の改良、都市の計画」の意義を語る際には「最も不潔な、最も貧困な、最も哀れむべき無産階級の市民」として記述されている。「貧民窟」の存在や住人たちは、都市問題を語る際にはその元凶として象徴的に語られるが、都市問題の解決の必要性を語る際には可哀想な「憐れむべき」存在として語られており、こうした語りの中で「貧民窟」や住人は、「実態概念」ではなく「関係概念」として扱われている。また、大屋や大林の公園

表-3 小公園・共同宿所・労働紹介所の開設時期

小公園	西野田小公園：1917年10月12日 築港遊園、北野小公園、清水谷小公園：1917年12月26日 阿波座小公園、九条小公園、御蔵跡小公園：1918年3月30日 西九条小公園：1919年3月30日 木津小公園：1922年3月30日
共同宿所	今宮（南区宮津町今宮中学南横手）：1919年6月29日 築港（西区鶴町）：1919年7月1日 西野田（北区西野田江成町茶園橋南詰）：1919年7月1日
労働紹介所	今宮（共同宿所と同位置）：1919年9月11日 京橋（東区京橋前ノ町）：1919年12月1日 築港（西区築港南海岸通）：1920年9月30日

論の中では、公園を、悪化した都市環境を蘇生させる機能を持つ装置として「関係概念」的に位置付けていることにも気づかされる。

大屋の別の論考『都市計画より見たる児童遊園の価値』では、「郊外の空気の清浄な、人間の疎なる、どんなに走り回っても広々とした野原がある」場所ではなく「一坪の土地でも空け難いやうな今宮、木津とか、或は長柄とかいふやうな家が建て詰った場所」に「子供を救」うために児童遊園を設置すべきだと主張されている³⁵⁾。しかし、そのすぐ後で設置の困難性を述べる。

どうしても我々の力ではさういふ困難なる下層階級の謂はば貧民窟、場末の町にさういふ子供を遊ばせるやうな広場を家の附近に造るといふことは、今日なほ目論見が附かないのであります³⁶⁾

大屋が公園論を展開する際、あるときは無産階級のために、またあるときは児童のために公園が必要であると唱える。一方で、小公園、児童遊園の意義を述べつつも小公園が利用されていない状況として「小公園は無頼漢の巣窟」等の問題視を紹介する。また、「貧民窟」を問題化し、その改良策として公園の設置を主張するが、主張したすぐ後で実現の困難性を言明し、設置した際の管理の在り方への言及はない。大屋の論は、公園設置の目的と目的に見合う利用者の設定には整合性が見られるが、しかし、実際の設置・利用・管理に生じている問題への解決策につながり得るような理論的枠組みは示し得ず、逆に論の不整合や自身のジレンマを浮かび上がらせている。

前節と本節でみた1910年代半ばから20年代半ばまでの10年間に展開された公園論は、社会改良や都市改良の手段として公園の役割を積極的に位置付けようとする点にその特徴及び先駆性があったと言える。しかし、当時の公園論の中で、「貧民窟」に表象される悪化した都市に対し、公園を「明るいきれいな空間」として表象することはできたが、管理や利用の問題を整合性を持って考えることの枠組みは形成され得なかった。これは公園論の中で利用者を設定しても、一義的には利用者は限定されず、また利用のしかたを想定してもそこから逸脱する利用の仕方が現出してしまうということなのだろうか。だとすれば、このことは、都市公園をはじめとする都市オープンスペースがその利用者を選定・選別し、ある限定された機能のみを特化することの困難性を示している。つまり、想定した出来事や利用者の枠組みからはみだした現象や存在をも迎え入れてしまう機能を、都市公園という空間装置がはたしてしまうことを示している。

5. おわりに

1910年前後からの公園設置および公園論の展開を当時の社会的文脈から把握し考察することを試み、個々別々に語られる公園の位置付けや役割が、1910年代半ばから、より社会の中で積極的な役割を公園に期待する論議が興隆してくる状況を検証した。

第2節では、実際の公園設置の展開とそれを支える理論的枠組みの検証として、大阪市議会における1909年の「北の大火」後の整備事業としての公園設置の論議と、1915年の大正天皇大典記念事業としての小公園設置の論議を検証した。その結果、「北の大火」後の整備事業として小公園設置が論議された際には、都市の再編における小公園設置の位置付けに関しては統一した見解は得られていないが、1915年から16年にかけての大典記念小公園の敷地設定の際には「貧乏部落」「人家稠密の地」を建設敷地

とする見解で一致していたことがわかった。

第3節では、1910年代後半の社会状況として、第一次大戦後からはじまる都市社会政策が単なる「救貧」もしくは「救済」だけを課題としていたのではなく、教育を通じて雑多な人々を「良国民」「健全なる労働者」「市民」へと馴化する意図を有しており、その空間装置として「公園」や「博物館」「図書館」を設定していたことを検証した。当時興隆してきた都市社会政策は「貧民」だけを施策の直接の対象とするのではなく、「貧民」から「市民」へという回路そのものを対象とする施策、もしくは、さらなる「市民」化への施策として位置付けられていたのである。

例えば、水野和一は「市民」への馴化、教化の装置としての公園の位置付けを「文化政策」という枠組みで提示し、賀川豊彦は都市改良の手段としての公園の効能を描いて見せた。これらの公園論に共通する論理展開は、第1に公園の位置付けを理論的もしくは具体的に語る際に、欧米の先進性との対比の上で国内の後進性を提示することであり、第2に「貧民窟」との対比で公園の効能が語られる点にある。当時、「貧民窟」の問題化と公園の称揚、すなわち「貧民窟」を都市の否定的な空間、公園を肯定的な空間として表象することは輻輳しており、さらに、都市計画法を根拠とする都市改編の中で、公園を他の空間装置と並んで相対的に位置付け、公園設置の合理性・客観性・正当性を不可疑なものとして浸透させていく論理展開が登場してくる。

第4節では、小公園設置後の公園論と実際の利用・管理をめぐる論議を検証した。当時の公園論には、実際の利用をめぐる生じている現象を論じる際、利用者の優先順位についての論理的不整合が看取される。例えば、「社会政策」という観点から公園の位置付けや意義を唱えた大林宗嗣は「労働者」を公園利用の筆頭にあげていたが、実際の公園での「労働者」の立ち振る舞いを目の当たりにした際には、「労働者」の行為は逸脱として提示され、その場合、何の説明もないまま「児童」の遊戯が公園利用の最優先にシフトしている。また、大屋壺城は、関係概念的な語りの中で、都市環境の悪化に対する公園設置の意義を積極的に示すことはできたが、しかし、実際の公園の利用や管理上の問題への解決策は示すことはできず、理念と実際の利用や管理をめぐるジレンマを現出させてしまっている。

以上見てきたように、1910年から20年にかけては、都市問題や社会問題の増大が語られ、問題解決に向けて公園の役割を積極的に位置付けようとする公園論が興隆した。特に、「貧民窟」の問題化と公園の推奨が輻輳して語られ、公園が都市計画に基づく都市改変の中で、他の空間装置と並んで相対的に位置付けられることにより、公園には都市を改良しうる「合理性」「客観性」が付与される。しかし、公園という空間そのものが物理的にオープンであるが故にはらまざるを得ない多種多様で雑多な人間を迎え入れる機能に対して、それを管理するために必要となる理論的な枠組みは当時の公園論には形成され得なかったと言えよう。

今後の課題としては、公園計画及び利用や管理に関する理論的枠組みの未形成に関し、当時の社会状況を勘案しつつさらに詳しく検証する必要がある。また、以上の検証結果をただ単に過去の批判もしくは称揚として終えるのではなく、先人達の思考や苦闘の在りようを、現代における都市オープンスペースをめぐる利用や管理に関する施策や実践の理論的枠組みの再検討・再構築を進めるための糧にできればと考えている。

註・引用・参考文献

- 1) 高橋理喜男(1963): 大阪市における小公園計画の源流: 造園雑誌 26(4), 17-23
- 2) 同上: 21
- 3) 大阪市会本会議事録(1915年10月27日)。
なお、1925年までの大阪市会議事録は大阪

- 市公文書館所蔵のマイクロフィルムによって採録したものである。
- 4) 大阪市会本会議事録(1915年10月27日): 議案第177号「御大礼記念事業ニ関スル件」
 - 5) 大阪市会本会議事録(1909年8月9日): 議案第176号「小公園新設及ビ道路新設拡張

- ニ関スル件」
- 6) 7) 8) 大阪市会本会議事録(1909年8月9日)および高橋前掲論文 p18を参照。
 - 9) 大阪市会本会議事録(1909年9月2日)および高橋前掲論文 p18を参照。
 - 10) 11) 12) 大阪市会本会議事録(1910年1月

- 11日)および高橋前掲論文p19を参照。
- 13) 東京では1910年に36の市区改正公園が児童遊戯の空間として設置されている。野嶋政和(1996): 明治末期における都市公園の近代化と学校教育: ランドスケープ研究59(5), 29-32を参照。大阪における児童の遊び場としての小公園確保の必要性は、1914年から15年にかけての『救済研究』誌上で展開され、東京市の公園設置に対する批判もなされている(生江孝之(1914): 小公園と児童遊技場: 救済研究2(8), 15-26、中外日報主張(1914): 子供の為に寺院境内を開放せよ: 救済研究2(10), 72-73所収、倉橋惣三(1915): 都市児童遊園の施設に就いて: 救済研究3(4), 102-104)。具体的には、児童公園としての小公園が「児童の悪化防止」にとって必要であるとともに、「不良」や悪人のたまり場であるから指導者や管理者を置かなくてはならないと主張し、こうした空間が「健全なる市民」を作り出すと位置付け、しかしながら東京市の公園には指導員が配置されていないと論難する。これらの議論は、東京市の小公園設置への児童遊技場の管理から見た事後調査となっており、1920年代に入って再び展開される児童の遊び場としての小公園の設置と管理を問題にする議論の端緒となっている。
- 14) 先行研究の「(市の)説得力が乏しい」という評価は、そもそも市の説明が説得力を有するためには「公園」という空間装置への共通理解が市当局と市議員にそれぞれに分けもたれていなければ不可能であるという「認識の共有可能性」の欠如を示唆している。1908年の市会で展開された各議員それぞれの公園論は、一つ一つは当時すでに普及しつつあったものだが、全体として見た場合、公園設置の意味や機能、計画論のレベルで錯綜していることがわかる。これは都市に公園を配置することが如何なる意味で必要なのかという計画論的な枠組みがまだ共有されていないことを示している。
- 15) なお、前年から『救済研究』誌上で提唱された児童の遊技場としての小公園という位置付けは市会での議論には上がっていない。
- 16) 大阪市会本会議事録(1915年10月27日): 議案第177号「御大礼記念事業ニ関スル件」および高橋前掲論文p20を参照。
- 17) 18) 大阪市会本会議事録(1916年2月26日): 議案第46号「小公園設置ニ関スル件」および高橋前掲論文p20を参照。
- 19) 20) 大阪市会本会議事録(1916年2月26日): 議案第46号「小公園設置ニ関スル件」および高橋前掲論文p21を参照。
- 吉本議員「(引用者註: 阿波座ノ) 付近ニ公園ノ無イノハ氣ノ毒デアルノミナラズ、此ノ地方ハ労働者ガ多数ヲ占メテ居リマス、一ツノ露路ノ内ニ二十八軒、或ハ四十八軒ト云フヤウナ所モアル、其ノ露路ノ内ハ雨天ニナルト子供ガ学校ヘ行クノニ傘モササレヌ、斯ウ云フヤウナ裏長屋ガ沢山ニアル、然ウ云フ所ニ住ム労働者ハ職人デアルカラ平日外出ラヌレバ仕事休シダニ朝日十五ノ外ハ一切出ラヌコトニナツテ居ル、付近ニ散歩場所モナイ、子供ガ遊ブコトモ出来ナイ、然ウ云フ氣ノ毒ナ地方デアルカラ、此ノ方面ニ第一ニ小公園ヲ設ケルコトガ必要デアルト認メマシタ」
- 21) 22) 大阪市会本会議事録(1916年10月2日): 議案第46号「小公園設置ニ関スル件」および高橋前掲論文p20-21を参照。
- 23) 大阪府は明治19年12月に宿屋取締規則を制定し、翌年4月に施行した(第1条「宿屋ヲ別テ旅人宿下宿屋木賃宿ノ三種トス」、第48条「木賃宿ハ大阪四區内ニ於テ營業スルヲ得ス其接續町村ニ於イテハ場所ヲ限リテ許可スヘシ但其區域ハ別ニ之ヲ定ム」)。木賃宿が許可された区域は「西成郡難波村字南河原 西成郡木津村ノ内 東成郡北平野七丁目八丁目 西成郡上福島村字羅漢前西成郡北野村『綱敷天神前以北京阪鐵道一番路切迄両側』 西成郡九条村字西九条」(附則第1)である。大阪府(1934): 明治大正大阪市史第六巻: 日本評論社を参照。
- 24) 長町については永橋為介(1996): 第5回内国勸業博覧会の敷地設定におけるスラムクリアランスへの影響: ランドスケープ研究58(5), 21-24を参照。
- 25) 大久保利武(1915): 大阪市に於ける商工補修教育の必要: 救済研究3(5), 小川滋次郎(1917): 教育の使命: 救済研究5(5), 12, 関一(1918): 都市社会政策: 救済研究6(5), 25-37
- 26) 大阪市囑託となった水野は、関一とともに大阪の都市社会政策を展開する理論家として期待された。水野に対する期待の大きさは、講演会での林知事による水野の紹介にもあらわれている。林市蔵(1918): 方面委員の設置については: 救済研究6(10), 2
- 27) 28) 水野和一(1918): 米国における社会改善事業: 救済研究6(10), 31-32
- 29) 30) 水野和一(1918): 商工都市に於ける文化政策(上): 救済研究6(12), 30-31
- 31) 32) 賀川豊彦(1919): 都市の心理的基礎: 日本建築協会2(2), 52
- 33) 例えば、片岡安率いる関西建築家協会による「貧民窟」調査など。「貧民窟」の問題化についての検証は、永橋為介(1998): 1910年代の大阪にみる「浮浪者」と「貧民窟」に関する言説: 平成10年度都市計画論文集, 415-420を参照。
- 34) 賀川前掲: 49-50
- 35) K.U生(1918): 大阪市の細民住宅に就いて(3): 関西建築協会雑誌1(6), 91
- 36) 37) 戸田正三(1920): 市民の健康に及ぼす住宅難の影響(上): 建築と社会3(8), 12
- 38) 都市計画の持つイデオロギー性については布野修司(1997): 都市計画批判のプロブレマティク・啓蒙・機能・普遍から参加・文脈・場所へ: 都市計画No.205, 40-44を参照。
- 39) 水野練太郎(1919): 都市改良問題: 日本建築協会2(1), 70
- 40) 「都市計画要鑑(復刻版)第2巻」1922: 73
- 41) 大阪市役所社会部(1923): 大阪市社会事業概要大正12年5月編: 30-31
- 42) 例えば1921年10月26日市会本会議では市教育部が「寺院境内ニ運動遊戯ノ設備ヲナシ一般ノ体育奨励ニ資」するための追加予算を請求するが、その際、議員から「小公園に対する位置付け」「利用時間の時間制限」「指導監督者の有無」とあわせて「風紀上ノ問題」に対する質問がなされている。大阪市会本会議事録1921年10月26日議案第233号「大正10年度大阪府大阪市歳入出追加予算」参照。
- 43) 岳洋生(1920): 市営社会事業を視るの記〜築港方面: 救済研究8(6), 78。なお「岳洋」は小河滋次郎の雅号である。
- 44) 45) 大林宗嗣(1923): 大阪市公園利用状態調査: 大原社会問題研究所雑誌1(1), 241
- 46) 大林宗嗣(1923): 都市社会政策としての公園問題: 大原社会問題研究所パンフレットNo10, 9
- 47) 同上: 54
- 48) 大林前掲: 60。なお、大林の利用実態調査報告では、九条小公園を初めとする小公園が市当局によって「人家稠密の『貧乏部落』」に設置するとの意図を持って建設されたことへの言及はない。
- 49) 先に見た大久保や小河、関、水野和一らの論考にみる馴化政策が、「労働者」を社会政策の中で関係概念的に語る代表である。1910年代後半から20年代にかけての労働者の労働規律の内面化や馴化政策やについては永橋為介(1998): 1910年代の都市大阪を事例とした「浮浪者」言説の構造: ランドスケープ研究61(5), 433-438を参照。
- 50) 永橋為介(1997): 大阪市における都市社会問題からみる1920年代の公園論の位相: ランドスケープ研究60(5), 405。なお上記論文では、大林や大屋の論に内在されていた不整合を剔出するには至らなかった。
- 51) 大屋壺城(1926): 小公園問題と大阪(1): 大大阪2(11), 38
- 52) 大屋壺城(1927): 公園設定の急務: 都市公論3(1), 57, 53) 同上: 55
- 55) 56) 大屋壺城(1928): 都市計画上より見たる児童遊園の価値(続): 社会事業研究16(2), 173

Summary: In this study, I examined the detail of small parks foundations on the 'HIN-MIN-KUTSU' in 1910's at Osaka, and analyzed the discussions over the park significance, the image of users and the park management in 1910-20's; between pre- and post-foundation of the small parks.

Especially, I examined the small park significances which a social policy and a city management had set up. So, I could make clear that when specialists and bureaucrats of a social policy and a city planning suggested a change for the worse of city and social environment, they did not only refer to the efficiency of small park, but also symbolically problems of 'HIN-MIN-KUTSU' represented as negativity of 'citizen society'; a criminal, insanitary, indecency. And also, I could make clear that specialists and bureaucrats of a social policy and a city planning could not have made a theorization of a park uses and management at that time although they could have positively suggested the small park functions against a change for the worse of city and social environment.